

苦しクルシイ

寂サビシイ

涼スズシイ

忙セワシイ

頼タノモシイ

懐ナツカシイ

耻ハズカシイ

久ヒサシイ

飢ヒモジイ

騒騒がしい

甚甚しい

欲ホシイ

眩マブシイ

貧マズシイ

困ムズカシイ難しい

見ミククルシイ苦しい

喧ヤカマシイ

宜ヨロシイ

荒アラアラシイ々しい

目目覺覚しい  
めめぼぼしい  
みみすすほほらしい



イマイマシイ  
忌々しい

ビビシイ  
美々しい

ノズラシイ  
珍らしい

イヤラシイ  
厭らしい

カワイラシイ  
愛らしい

コイバシイ  
香ばしい

アワレナ  
哀な

イヤナ  
厭な

シズカナ  
静な

シカクナ  
四角な

ジョブナ  
丈夫な

ソマツナ  
粗末な

タイギナ  
大儀な

タイクツナ  
退屈な

ナマイキナ  
生意氣な



賑 <small>ニギヤカナ</small> な				
不便 <small>フベンナ</small> な				
變 <small>ヘシナ</small> な				
満足 <small>マンゾクナ</small> な				
無邪氣 <small>ムジャキナ</small> な				
面倒 <small>マンドロナ</small> な				
亂暴 <small>ランボウナ</small> な				
立派 <small>リツパナ</small> な				

動詞

この部には動詞を四段動詞、下二段動詞、上二段動詞、一段動詞、變格動詞の順に大體排列してある。その各類をまた語尾によつて幾分、分けて見た。なほ、最初の八頁を動詞の活用形の調査の爲にさいた。

「飽きる」「足りる」「借りる」は標準語では上一段活用であるが、本州西部方言では四段活用である。「死ぬ」は標準語では四段活用であるが本州西部では奈行變格活用の地方が多い。かう云ふ活用の種類の相違で注意すべきは二段動詞と一段動詞とである。特に一段動詞は良行四段となる地方がある(「出る」「寝る」も同様)。

「出る」「出来る」は地方によつては使用法が標準語とかなり違つてゐる。「有る」「居る」にもそんな例がある。

亂暴な云ひ方に「ブンなぐる」「ヒツぱたく」など云ふ言ひ方がある、之も集めて見たい。動詞の方言形を記すには肯定と否定との二形を記入する事、例へば「歩く」の標語には東京語なら「アルク」「アルカナイ」の二形を記入する。

動詞



動詞活用

次ノ東京語ヲ方言ノ云ヒ方ニ改メ各語ノ下ニ全部片假名ヲ記入スルコト。  
之ハ活用形ノ變化ヲ調べルタメデスカラ、ナルベク同シ動詞ヲ使テ下サイ。

飲む	枯れる	懲りる	蹴る	着る	居る	死ぬ
来 <sup>ク</sup> る	爲 <sup>ス</sup> る	勉強する	辭する	案じる		飲まない

枯れない	懲りない	蹴ない	着ない	居らない	死なない	来 <sup>コ</sup> ない	爲 <sup>シ</sup> ない	勉強しない
辭さない	案じない		飲みます	枯れます	懲ります	蹴ます	着ます	居ります

動詞活用



死にます	懲りた
來 <small>キ</small> ます	蹴 <small>キ</small> った
爲 <small>シ</small> ます	着 <small>キ</small> た
勉強 <small>キョウケン</small> します	居 <small>オ</small> った
辭 <small>シ</small> します	死 <small>シ</small> んだ
案 <small>アン</small> じます	來 <small>キ</small> た
	爲 <small>シ</small> た
飲 <small>イン</small> んだ	勉強 <small>キョウケン</small> した
枯 <small>カ</small> れた	辭 <small>シ</small> した

案 <small>アン</small> じた	來 <small>ク</small> る事は
飲 <small>イン</small> む事は	爲 <small>ス</small> る事は
枯 <small>カ</small> れる事は	勉強 <small>キョウケン</small> する事は
懲 <small>チョウ</small> りる事は	辭 <small>シ</small> す事は
蹴 <small>キ</small> る事は	案 <small>アン</small> じる事は
着 <small>キ</small> る事は	飲 <small>イン</small> むのです
居 <small>オ</small> る事は	枯 <small>カ</small> れるのです
死 <small>シ</small> ぬ事は	懲 <small>チョウ</small> りるのです



蹴 <small>ク</small> るの <small>シ</small> です	着 <small>ク</small> るの <small>シ</small> です	居 <small>ク</small> るの <small>シ</small> です	死ぬ <small>ク</small> の <small>シ</small> です	來 <small>ク</small> るの <small>シ</small> です	爲 <small>ク</small> るの <small>シ</small> です	勉強 <small>ク</small> するの <small>シ</small> です	辭 <small>ク</small> すの <small>シ</small> です	案 <small>ク</small> じるの <small>シ</small> です
	飲 <small>ク</small> めば	枯 <small>ク</small> れば	懲 <small>ク</small> りれば	蹴 <small>ク</small> れば	着 <small>ク</small> れば	居 <small>ク</small> れば	死 <small>ク</small> ねば	來 <small>ク</small> れば

爲 <small>ク</small> れば	勉強 <small>ク</small> すれば	辭 <small>ク</small> せば	案 <small>ク</small> じれば		飲 <small>ク</small> ま <small>シ</small> う	枯 <small>ク</small> れ <small>シ</small> よう	懲 <small>ク</small> り <small>シ</small> よう	蹴 <small>ク</small> よう
着 <small>ク</small> よう	居 <small>ク</small> ら <small>シ</small> う	死 <small>ク</small> な <small>シ</small> う	來 <small>ク</small> よう	爲 <small>ク</small> よう	勉強 <small>ク</small> し <small>シ</small> よう	辭 <small>ク</small> さ <small>シ</small> う	案 <small>ク</small> じ <small>シ</small> よう	



動詞活用

洗った	眠った	借りた	持った	立った	飛んだ	讀んだ			

飲め	枯れろ	懲りろ	蹴ろ	着ろ	居れ	死ね	来い	爲ろ
勉強しろ	辭せ	案じろ		泣いた	漕いだ	指した	落した	買った



○方言ノ動詞ニモ打消(否定)ノ形ヲ必ズ併記シテ下サイ

**標語欄**

片假名テ示シタ形ヲ使用シナイ地方テハ抹消シテ下サイ、使用スル地方テハソノ打消ノ形ヲ書入レテ下サイ。

**補充欄**

下ニ舉ゲテアル單語ハ參考ニ示シタダケテス、之ニ拘泥セズ特色アル方言ヲ集メテ下サイ

歩 <small>アルク</small> く	行 <small>イク</small> く	俯 <small>ウツムク</small> く	驚 <small>オドロク</small> く	(安座 <small>アウラオカク</small> を)かく	(汗 <small>アセオカク</small> を)かく	私語 <small>ササヤク</small> く
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
ば	ば	ば	ば	ば	ば	ば
く	く	く	く	く	く	く

泣 <small>ナク</small> く	退 <small>ドク</small> く	抱 <small>ダク</small> く	躓 <small>ツマズク</small> く	搗 <small>フク</small> く	叩 <small>タタク</small> く	(咳 <small>セク</small> を)せく	好 <small>スキ</small> く	裂 <small>サク</small> く
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ
ば	ば	ば	ば	ば	ば	ば	ば	ば
く	く	く	く	く	く	く	く	く

拔ヒキく  
懷イダクく  
鳴ナクく

解トクく  
つツクく  
ぶブクく  
ばバクく  
やヤクく

焚ヤクく  
突ツクく  
續ツクく  
つツクく  
ばバクく  
急セクく







争ふ <small>アラソフ</small>	連立つ <small>ツレダツ</small>	打つ <small>ウツ</small>	寄越す <small>ヨコス</small>	汚す <small>ヨコス</small>	飾す <small>ノカス</small>	蒸す <small>ムス</small>
商	持立育勝			免も燃増ふは		
ふ	つつつ			るてなすすすかやす		
				すすすすすすす		

干す <small>ホス</small>	浸す <small>ヒタス</small>	修繕す <small>ナイス</small>	(火を)點す <small>トモス</small>	欺す <small>ダマス</small>	倒す <small>クオス</small>	探す <small>サカス</small>	轉かす <small>コロカス</small>	破す <small>コワス</small>								
殘	伸	釣	潰	足	外	濟	す	晒	覺	冷	差	刺	殺	漉	こ	こ
す	ぼ	る	す	す	ら	ま	か	ま	ま	す	す	す	す	す	ぼ	な
す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す	す



遊 <small>アスブ</small> ぶ	病 <small>ワズラフ</small> ふ	醉 <small>ヨウ</small> ふ	貫 <small>モラク</small> ふ	諂 <small>ヘツラフ</small> ふ	拾 <small>ヒロウ</small> ふ	願 <small>ネカフ</small> ふ	香 <small>ニオウ</small> ふ	荷 <small>ニナウ</small> ふ
浮	笑	拂	計	狙	縫	販	習	違
ぶ	ら	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ
						吸	救	仕
						ふ	ふ	舞
						ふ	ふ	狂
								ふ

償 <small>ツクナフ</small> ふ	誘 <small>サソフ</small> ふ	調 <small>カラカフ</small> 弄 ふ	負 <small>オブウ</small> ふ	追 <small>オウ</small> ふ	補 <small>オギナフ</small> ふ	奪 <small>ウバフ</small> ふ	(小言 <small>コゴトヲ</small> を <small>ユウ</small> )云 <small>ユウ</small> ふ	言 <small>ユウ</small> ふ
嫌	氣	か	買	叶	圍	覆	占	歌
ふ	ふ	ば	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	合
								請
								合
								窺
								祝
								洗
								逢
								合
								扱
								味
								あ
								し
								ら
								ふ



握 <small>ツカム</small> む	頼 <small>タノム</small> む	沈 <small>シズム</small> む	苦 <small>クルシム</small> む	(水 <small>クヅム</small> を)含む	屈 <small>カガム</small> む	羨 <small>ウラヤム</small> む	恨 <small>ウラム</small> む	産 <small>ウム</small> む							
望	盜	馴	積	包	た	疊	濟	澄	涼	進	し	白	菱	拒	好
む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む
	染				る						が				

痛 <small>イタム</small> む	勇 <small>イサム</small> む	怪 <small>アヤシム</small> む	汗 <small>アセバム</small> ばむ	(實 <small>アカラム</small> が)赤らむ		喜 <small>ヨロコブ</small> ぶ	叫 <small>サケブ</small> ぶ	轉 <small>コロブ</small> ぶ								
暗	汲	組	黄	刻	嚙	悲	圍	拜	編		呼	結	運	ね	並	飛
む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ	ぶ
			ば			し								こ		







捉 <small>ツカマ</small> まる	誹 <small>ソシ</small> る	強請 <small>セビ</small> る	座 <small>スワ</small> る	知 <small>シル</small> る	叱 <small>チ</small> る	囀 <small>サエズ</small> る	觸 <small>サワ</small> る	困 <small>コト</small> る								
縮 <small>チヂ</small> まる	點 <small>ツキ</small> る	便 <small>ツカ</small> る	溜 <small>ツル</small> る	崇 <small>タカ</small> る	た <small>タ</small> る	反 <small>サカ</small> る	剃 <small>カ</small> る	摺 <small>ス</small> る	廢 <small>クサ</small> る	啜 <small>ツブ</small> る	繩 <small>ツル</small> る	絞 <small>シ</small> る	滌 <small>シ</small> る	縛 <small>シ</small> る	悟 <small>サ</small> る	下 <small>シ</small> る

斷 <small>コト</small> る	配 <small>クバ</small> る	加 <small>クワ</small> はる	腐 <small>クサ</small> る	括 <small>クケ</small> る	歸 <small>カエ</small> る	可愛 <small>カワイ</small> がる	仰 <small>オウ</small> る	怒 <small>オコ</small> る							
凝 <small>コ</small> る	削 <small>ク</small> る	く <small>ク</small> する	曇 <small>クモ</small> る	縊 <small>ク</small> る	潜 <small>ク</small> る	切 <small>ク</small> る	氣 <small>ク</small> る	氣 <small>ク</small> る	刈 <small>ク</small> る	代 <small>カ</small> る	同 <small>カ</small> る	か <small>カ</small> る	飾 <small>カ</small> る	重 <small>カ</small> る	權 <small>カ</small> る



脅請る ユスル	漏る モル	交る マシル	廻る マワル	守る マモル	誇る ホコル	流行る ハキル	走る ハシル	始まる ハジマル
む	食	實	跨	ま	曲		端	
し			く				折	
る	る	る	る	る	る	る	る	る

罵る ノシル	粘る ネバル	濁る ニコル	糊る ナブル	撲る ナグル	紛失る ナクナル	怒鳴る ドナル	吃る ドモル	取る トル
の	乗	登	殘	練	捻	ね	直	塗
せ						だ	切	
る	る	る	る	る	る	る	る	る



嫁入るヨノイル

弱るヨワル

だまかす<sup>△</sup>

ちらかす<sup>△</sup>

読みからかす<sup>△△△△</sup>

だまくらかす<sup>△△△△</sup>

いちくる<sup>△</sup>

すべくる<sup>△</sup>

盛る  
もぐ  
破る  
譲る  
揺る  
燃る  
割る

アケル  
明ける

カケル  
駈ける

カタメケル  
片付ける

カコツケル  
託言ける

クジケル  
屈ける

シツケル  
湿ける

タスケル  
助ける

預ける  
活ける  
いちける  
受ける  
怖ける  
缺ける  
掛ける  
傾ける  
くける  
けしかける  
裂ける  
つける  
溶ける  
とろける







ハラヲタテル  
(腹を)立てる

タズネル  
尋ねる

ネル  
寝る

アタエル  
與へる

アツラエル  
誂へる

オシエル  
教へる

カツエル  
算へる

撫でる

重ねる

すねる

束ねる

はねる

ひねる

押へる

代へる

考へる

支へる

クワエル  
加へる

コシラエル  
作へる

コラエル  
堪へる

ナラベル  
並べる

アタメル  
暖める

アキラメル  
諦める

アツメル  
集める

イジメル  
いちめる(虐待)

捕へる

携へる

貯へる

控へる

震へる

調べる

改める

青ざめる

戒める

埋める

固める

きめる

定める

さめる



恐れる <small>オソレル</small>	入れる <small>イレル</small>	暴れる <small>アバレル</small>	呆れる <small>アキレル</small>	飢える <small>(ウエル) ヒモジクナル</small>	冷える <small>ヒエル</small>	殖える <small>フエル</small>	生える <small>ハエル</small>				
隠れる <small>カクレル</small>	遅れる <small>オソレル</small>	うなされる <small>ウナサレル</small>	荒れる <small>アラレル</small>	現れる <small>アワレル</small>	据える <small>ツケル</small>	植える <small>ウエル</small>	燃える <small>モテル</small>	悶える <small>ムンデル</small>	萌える <small>モユル</small>	吠える <small>ヘウル</small>	煮える <small>ニデル</small>

凍える <small>コゴエル</small>	甘える <small>アマエル</small>	纏める <small>マトル</small>	始める <small>ハジメル</small>	嘗める <small>ナメル</small>	咎める <small>トカメル</small>	溜める <small>タメル</small>	(眼が)覚める <small>サメル</small>					
絶える <small>ツツメル</small>	消える <small>キレル</small>	聞える <small>キクメル</small>	覚える <small>サメル</small>	褒める <small>ホメル</small>	慰める <small>ナグメル</small>	眺める <small>ノゾメル</small>	止める <small>トメル</small>	詰める <small>ツメル</small>	縮める <small>チヂメル</small>	染める <small>シメル</small>	責める <small>ツメル</small>	勧める <small>カンメル</small>



イキル 生きる	アキル 飽きる				ワカレル 別れる	ヨヨレル 汚れる	フクレル 膨れる	ハレル 腫れる
過 ぎ る	盡 きる					割 れる	忘 れる	破 れる
							や つ れる	漏 れる

ハズレル 外れる	ヌレル 濡れる	フカレル 疲れる	タオレル 倒れる	シヤレル 洒落る	シツレル 時雨る	コワレル 破れる	クタビレル 草臥れる	クレル 臭れる
も た れる	も つ れる	ま ぎ れる	觸 れる	晴 れる	は ぐ れる	ね ぢ れる	馴 れる	流 れる
							潰 れる	垂 れる
							爛 れる	萎 れる
							じ れる	こ ぼ れる
							こ な れる	暮 れる
							崩 れる	枯 れる











出 <sup>デ</sup> る (月が出る)		
出 <sup>デ</sup> 来る (明日、出来る)		
有 <sup>ア</sup> る (本がある)		
居 <sup>イ</sup> る (人がゐる)		
居 <sup>イ</sup> る (私が居る)		

雑 詞

ここには普通に云ふ副詞と接續詞と感歎詞とを主にして集めてみた。

副詞は特に種類が多いので、極めて主要なものばかりをあげた。

副詞は言葉によると「一寸とも知りません」「まさか、そんな事はありますまい」などの様に、特別な形式と呼應する事がある、之も地方によると相違のあるものがある、「とても大きい」などは方言的な云ひ方である。こんな事を注意したい。

副詞の中、寫聲語(「雨がバラバラ降る」「雷がゴロゴロ鳴る」の類)擬容語(「ノソノソ歩く」「アッサリ話す」の類)には地方的なものがある之を集めて見たい。應答語には肯定、否定の外に、只、ほんの返事だけのものもある、又、使ひ方も外國語の Yes や No の様な使ひ方をする地方があると云ふ。

文の終りにつける一種の感歎詞「ノンシ」「ナンシ」「ナモシ」のやうなものもここに例をあげて集めて置きたい。











是非 シヒ

確に タシカニ

折角 ヒツカク

いつそ イツソ

猶更 ナオサラ

つい ツイ

生憎 アイニク

なまなか ナマナカ  
なまなか ナマナカ

矢張 ヤハリ

寧

更

流

石

最も イチバン

態々 ワザワザ

色々 イロイロ

一寸も チツトモ

なかなか ナカナカ

迎も トテモ

全く マツタク

只 タツタ

今少し モースコシ

とんと



少しも スコシモ	結局 ツマリ	互に タカイニ	誠に マコトニ	何しろ ナニシロ	兎に角 トニカク	さうして ソウシテ	さうすると ソウスルト
就其或尤		と		ころが			
中上はも							

況や マシテ	但し タダシ	けれども ケレドモ	しかし シカシ	それ故 ソレダカラ	それなら ソレナラ	そこで ソコデ	
就其或尤		と		ころが			
中上はも							



別辭	夜	晝	朝	挨拶 オハヨ、コンチワ、 コンバンワ、サヨ、ナラの類				句尾助辭 (さうです)ネ、ヨ、ワの類	否
ナ エ ノ ナ ン ン モ モ シ シ									

諾	呼掛 モシモシ、オイ、の類	感嘆 オヤ、アラ、マ、ヤレヤレの類						應答 ハ、(諾)ハイ、(否)イエエの類



寫聲語、擬容語。

補遺

補遺











補  
遺

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

二三九

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

二三八



方言研究書目抄

又部省國語調査委員會刊行物  
 方言採集簿 明治三七、刊  
 音韻調査報告書(分布圖二九枚付) 明治三八、刊  
 口語法調査報告書(二冊)(分布圖三七枚付) 明治三九、刊  
 口語法及口語法別記(二冊) 大正六、刊  
 全國方言集 静岡縣警察部 昭和二、刊  
 日本樹木名方言集 農商務省山林局 大正五、刊  
 鳥類の方言 農林省農務局 大正一四、刊  
 國語の方言區劃(東條操) 昭和二、刊  
 大日本方言地圖(東京、育英書院)(一圓三〇錢)  
 方言改良論 青田節 明治二一、刊  
 音韻漫錄 大嶋正健 明治三一、刊  
 東北發音矯正法 伊澤脩二 明治四二、刊  
 東方言語史叢考 新村出 昭和二、刊

諸國方言物類稱呼(五)越谷吾山安永四、刊  
 俚言集覽 大田全齋? 明治三二、刊

方言に就いて 保科孝一 帝國文學 四ノ二  
 方言の性質及び其調査法 岡倉由三郎  
 方言の本質 東條操 國語と國文學 三六  
 方言學、その理論と實際 小林英夫 人類學雜誌九〇  
 方言研究と方言文學 東條操 民族 三ノ三  
 歷史上から觀た日本の方言區劃 日本文學講座 第九卷 橋本進吉  
 方言の小研究 柳田國男 民族 三ノ四  
 國語史(第一章) 春日政治  
 方言參考資料目錄 國文學講座 第二冊 田村榮太郎  
 國語學參考論文目錄 國語と國文の研究一五 同人 國語と國文學四九

五十音圖

五十音圖表 は、その地方音の種類を調査するための表である。地方人に五十音を發音させて、その發音をそのまま、記入する、記入用の文字は理想的に云へば世界音標文字がよいが、兎に角、音が正しくあらはれば假名でもよい。その地方にない音節は空欄とする。拗音の欄には、「カ、ガ、ガ」の各行に限り、「キヤ、ギヤ、ギャ」等の外に「クッ、グッ、グ」等の音の有無をも記すこと。

音韻轉訛表 下段の語例に示した例にならひ、なるべく多數の轉音例を訛語と原語と併記して記入すること。轉訛の傾向著しきものはその傾向を註記すべし。

アクセント調査表 表中の各語にアクセントをつける事、その方法はアクセントある音節の右側に線を引く。(例へばハシ。ハシ)。なほ、附録音韻調査法の條を参照すること。



音韻表

ワ	ラ	ヤ	マ	バ	バ	ハ	ナ	ダ
			*				*	

地方五十音圖表

							行	段
タ	ザ	サ	ガ	ガ	カ	ア	ア	直音
							イ	
							ウ	
							エ	
							オ	
							ヤ)	拗音
							ユ)	
							ヨ)	
			*				其他	鼻*



音韻表

マ 等行	ナ 行	ラ 行	ダ 行	ザ 行	ウ	イ	オ	ウ	エ	イ
紐、ヒボ					南、ニナミ		死ぬ、シグ、シム		霰、アラネ	
來年、ダイネン					座敷、ダシキ		子供、コロモ		針、ハル	
菴、ミシロ					沼、ノマ		鰻、オナギ		蜻蛉、トンプ	
飯、ミシ					狐、ケツネ		人參、ネンジン			

音韻轉訛表

オ エ	ア エ	オ イ	エ イ	ウ イ	ア イ	原音
						轉音例
						語例
單衣、ヒテモノ						蠅、ヘ
蛙、ケール						貝、キャー
白粉、オシレー						挨拶、エーサツ
時計、トケー						大根、デーコン
水道、スードー						
手拭、テヌギー						
テヌゲー						



アクセント調査表

一音節語	ヒ(日) ヒ(火)。ナ(名) ナ(菜)。エ(柄) エ(繪)。オン(恩) オン(音)。
二音節語	ハナ(花) ハナ(鼻)。アメ(飴) アメ(雨)。カキ(柿) カキ(牡蠣)。ツル(蔓) ツル(鶴)。ハシ(箸) ハシ(橋) ハシ(端)。
三音節語	アツイ(厚い) アツイ(暑い)。ナラス(鳴らす) ナラス(馴らす)。ハカマ(袴)、ハオリ(羽織)、タマゴ(卵)、ミカン(蜜柑)、コメヤ(米屋)。
四音節語	カラカサ(傘)、トリカゴ(鳥籠)、サンカク(三角)、ホバシラ(帆柱)、カミナリ(雷)、アサガオ(朝顔)。

方言文例

方言文例は六十章の短文からできてゐる、語法の重要な諸形式を含んだもので、之を利用して方言語法の輪畫を知るのが目的である。調査者は、たゞ全文を純粹な方言に譯して餘白に記入すればよい、記入には次の諸注意が必要である。

- 一、方言譯も原文に従つて句讀をうつこと。
- 二、嚴重に發音のまま記すこと。漢字を一字も混ぜぬこと。(方言の表記法の條参照)
- 三、原文と同じ程度の尊敬卑下の方言的云ひ方を用ゐること。
- 四、純粹な方言の云ひ方に従ふこと。今日用ゐられぬ古形にても差支なし、但し、其旨を註記すること。女の言葉も註記すべし。
- 五、方言の語脈、文例と相違する場合に限り原文を意譯して差支なし、その他はなるべく原文をあまり離れざること。



文例方言譯

文ノ調子ノ著シキモノヲ註記シテ下サイ。  
例ヘバ揚(尻上リ調)。抑(尻下リ調)。

- (一) お前達は、六時前に、起きなけりや、いけないよ。
- (二) 延びるか、延びないか、まだ、わからない。
- (三) 借りるよりほか、仕方がない。
- (四) 飽きると、すぐ、遊びに、でかける。
- (五) あの病人は、まだ、中々、死ぬまい。

- (六) よく、御覽。これと、それと、どつちが、古い。
- (七) お醫者様に、早く、見てもらふがいい。
- (八) むづかしい本では、讀めないが、假名つきなら、私にでも、讀めるだらう。
- (九) 下の、狭い座敷に、雨が漏る。
- (十) 黄色な花は、菜種で、白いのは、大根だ。



(十一) あの男に、そんな手紙が、書けるものか。

(十二) 昨日は、行かれなかつたが、今日こそは、きつと、出掛けるつもりだ。

(十三) 妙な事には、母に、叱られるのが、一番、恐しかった。

(十四) 随分、ひどく、蟲に、くはれた。

(十五) 御子様方に、泣かれては、さぞ、お困りでせう。

(十六) 下女に、庭を、掃かせろ。

(十七) わざく、見させたらば、大きな、犬だつた。

(十八) お花や、もつと、よく、煮ておくれ。石のやうに、堅くつて、食べられないぢやないか。

(十九) 墨で、お書きなさい。筆は、ないのか。

(二十) お竹さん、水を、持つておいで。



(廿一) ここへ来い。これを見ろ。誰が、何と云はうと、もう、こんな事は、するな。

(廿二) 菓子が食ひたいなあ。新聞をほしい。

(廿三) 飲みながら、ゆつくり、話ませうよ。

(廿四) ここから、あすこまで、船で行かう。

(廿五) この柿は赤いけれど、澁からう。

(廿六) あれやこれやで、來年は、出てこられまい。

(廿七) お風呂を、おめしになりましたから、およつては、如何です。

(廿八) こちらへ、伺ふきりで、どちらへも、あがりません。

(廿九) これを、已に、呉れないか。「誰が、やるものか。」

(三十) いくら、考へたつて、貴様に、このわけが、わかるものか。



(卅一) 運動がてら、町を見に、行きませう。

(卅二) 此頃は、雨ばかり、降つて居たが、久しぶりで、晴れたから、今夜は、人が、出る事だらう。

(卅三) この蜜柑は、酸っぱいから、捨てよう。

(卅四) 今日は、寒いので、人出が、少い。

(卅五) お前も、聞いたらうが、困つたものだ。

(卅六) あれ程、お頼み申したのに、何故、あなたは、買つて来て、下さらないのです。

(卅七) 南の方へ、二三丁、行けば、溜へ、出ます。

(卅八) 蚊さへ、少ければ、夏は、樂だ。

(卅九) 行くとも、行かないとも、勝手にしろ。

(四十) 来るやら、来ないやら、あてにならない。



(四十一) 誰でも彼でも、さう、云ひましたつけ。

(四十二) 酒を、飲んだり、歌を歌つたりして、半日、遊んで、行きました。

(四十三) 子供ぢやあるまいし、その位の事は、できるさ。」私にや、とても、出  
来ない。」

(四十四) ここにあるのは、先生の本か。」いゝえ、學校のです。」

(四十五) これを、十錢ばかり、下さい。

(四十六) 二人で、七枚づつ、書いたに、違ひない。

(四十七) この帽子は、いくらだ。」はい、一圓で、ございます。」

(四十八) この間、父が、落した本は、たしかに、拾つた人がある。

(四十九) 叔父さんが、錢を、ここらで、なくしたとき。

(五十) 私が、教へて上げようか。」はい、ありがたうございます。」



(五十一) 兄は、病氣にかかつて、寝てゐる。弟は、鞠を、蹴つてゐる。

(五十二) 何もかも、君に、まかせろ。

(五十三) 兄弟とも、顔は、人でも、心は、まるで、鬼のやうだ。

(五十四) 友達と、約束した事も、みんな、むだになつて、しまつた。

(五十五) あんなに、ほしがるものを、取上げてしまふのは、かはいさうだ。

(五十六) この方は、山田さんと云ふ方です。

(五十七) 入物ごと、いたゞいて、宜しう、ございますか。

(五十八) 聞けば、聞くほど、あはれな話ですね。

(五十九) 今、起きようと、してゐるところさ。

(六十) さうか。だが、大分、眠むさうだね。



**當地方の方言の特徴**

當地方の方言の音韻、語法、單語の特徴は要約すれば次の如きものである。



## 附 録

### 方言採集の準備と諸注意

漫然とでかけた物見遊山からは、ろくな獲物が得られないやうに、不用意な方言採集旅行は失敗に終りがちである。そこで相當な順序をたて、準備する事が必要となる。

先づ、調査すべき地方の方言に關する書籍や記事をできるだけ多く讀む。讀むに従つて大體、その方言の輪畫がわかると共に、澤山の疑問が湧いて來る、之が調査の要項となる。之を手帳に控へておく。

方言書類はその地方の圖書館又は官廳、學校などに就て見る事が出来る、單行本は多く地方官廳や教育會から出版されてゐる。方言の記事は地方新聞や教育會雜誌や郡誌、郷土誌などによく出てゐる。



愈々地方に臨んだなら、地方人に尋ねて方言の中心地と思はれる所を數ヶ所選んで採集にかゝる、答者には純粹な若干の地方人を選ぶ。(男女老若によつて方言には多少の相違があるから片よつてはいけない。)よく調べてみると地方には熱心な方言研究家が必ず居るから其を利用する。

短い時日で廣い區域を調べようと云ふ時には師範學校に就て生徒を調査する事が便利である。途上の採集も必要だが、他地方人も混入して居るから、後で純粹な地方人によつてその正否を正さないといけない。地方人では老人や女子が純粹な方言を保存して居るが、一人の言葉を過信せず、多數に聞く事が極めて大切な事である。

質問者は出来るだけ答者の氣分を注意して疲勞させてはいけない、疲勞した答者はためを云ふ恐れがある。質問する者はどこまでも打解けて相手を全然信賴した風を見せ、腹の中では冷靜な態度で相手の言葉を一々吟味して行く。聞いた言葉は手まめに記録する方がよいが、その爲に答者を固くしてはいけない。方言採集者は細心である事、根氣のよい事、鋭敏な耳を持つ事が第一の資格である。

それに言語學や、音聲學や、心理學や土俗學などの素養があれば申し分はない。

方言資料目録は昭和二年十二月號以下の「國語國文の研究」に田村榮太郎氏の調査が出て居る。なほ、本書の方言書目を参照せられたい。

### 音韻の調べ方

音韻を學問的に調べるには鋭い耳の外に音聲學の知識が入用である。さういふ人の爲には次の参考書を御勧めしたい。

佐久間鼎氏 國語の音聲とアクセント(同文館)、日本音聲學(京文社)

神保格氏 國語音聲學(明治圖書株式會社)

石黒魯平氏 國語教育の爲めの音聲學(目黒書店)

プレトネル氏 實用英佛獨露の發音(同文館)

これから五十音圖をもととしてごく通俗な音韻の調べ方を述べて見よう。

音韻の調べ方は音の種類と音の變化との二方面に分れる。



## 音の種類

音の種類の研究は母音、子音、音節の順で行ふ。五十音圖の第一行の「ア、イ、ウ、エ、オ」の五つの音は短母音である。之を延ばした「アー、イー、ウー、エー、オー」も母音で之を長母音と云ふ。母音を二つ重ねた「アイ、アエ、アウ、エイ、ウイ、オイ」等を重母音と云ふ。之等の母音の如何なる種類を地方音が含んで居るか、之を先づ調べて見る。

この調査はどこまでも實地の言葉に即して調べなければならぬ。例へば東京では「ア」の短母音はアメ(雨)アシ(足)など語頭に最も多く、語間にもオーアメ(大雨)スアシ(素足)のやうにかなり有る音であるが、語尾では極めて稀である。實例を調べて見ると、こんな現象はよく分かる。長母音「アー」は感嘆詞として存在するが、其外にはあまり多く用ゐられない。「アー」は理論的にはあり得る音であるが、實際の用例の少い音だと云ふ事が分る。重母音の「アイ」も應答語やアイ(鮎)アイツ(彼奴)などに含まれてゐるが漢語系のものにはアイ(愛)ヒアイ(悲哀)アイサツ(挨拶)のやうに多くの例がある。「アウ」の如きは極めて例が少い、(逢ふ)と云ふ動詞などの外に一寸考へつかない。「アエ」となると用

例は全く無い、但し、以上は「ア」の單音の場合で子音と結合する場合は全く別である。之は理論的に存在する丈である。

こんな風に「イ」「ウ」「エ」「オ」等も一々調べて見る。

「イ」などになると多くの地方で東京風の音とは違ふ一種の音を使つてゐる。こんな東京に無い音は一層注意してその發音の工合を細く調べる、即ち口形や、舌の高さ、形などを調べる。地方によると東京風の「イ」と、一種の訛つた「イ」と二種行はれてゐる場合もある、そんな時には、其がどう使ひ分けられてゐるかを研究する。

次には「カ」行以下の音にうつらう。

「カ」行以下の五十音圖の音は、世間では一つの音のやうに考へてゐるが之は、學問上で云ふと母音と子音との結合したものである、k(子音)とa(母音)とが結合してkaと云ふ音になる、この「カ」のやうなものを音節と云ふ。五十音圖は、音韻表と云ふより實は音節表なのである。

日本語の音韻研究はこの音節を單位として調べるのが便利のやうである。



この各音節につき短音、長音を調べて行く。

調べる順序は「カ」の短音、「カー」の長音、「カイ」「カウ」等のkと重母音との結合音。實例、カニ(蟹)ミカン(蜜柑)アカ(赤)カカー(嬢)カイ(貝)カウ(買ふ)。

これ等は「ア」母音の條で述べたのと調べ方は違はないが、その外に所謂、拗音を調べる。

「カ」行には二通りの拗音がある。「クツ」と「キャ」とである。

「クツ」は火事とか喧嘩とか云ふ言葉の中に含まれてゐるが東京語には存在しない音である。この長音「クツ」は全く無い。

「キャ」は客とか脚絆とか漢語系の語に多い、この長音「キャ」は叫聲の外には標準語にはない。(キョーなどは漢語系には澤山あるが、キャは漢語にもない)

地方によると語頭に限つて「カ」の發音の出来ない所もある。(その癖、語間、語尾ならば完全に發音する)この場合語頭の「カ」を「ハ」に訛つたり、「ア」に訛つたりする。

音の調査にはいつも、語頭音と語間音とは分けて調べなければいけない。

東京の「カ」行の濁音が語頭では「ガ」(ga)、語間では「ガ」(ga)なのも此の例になる。

こんな風に各音節を調べて行く。

鼻音について最後に書いて置く、今日の東京語には四種の鼻音がある、トンボ(蜻蛉)の鼻音は唇音でmであり、ダンナ(旦那)のは舌音でnであり、レンダツ(煉瓦)のは口蓋音リであり、ニホン(日本)のは一種の口蓋音Nである。

これは發音する時の口や舌の工合を考へると分る。

地方には東京語にない音節がかなり多い、yeやwiやziやtuや色々の音節がある。

又、東北の「ス」や「ツ」には東京語にない母音の「i」と云ふ音が含まれて居り、出雲の波行音には「F」と云ふ子音が含まれてゐる。

兎に角、五十音圖を基礎とし、東京音との相違を調べて行くといふ。

その結果は五十音圖式の音節表なり、又は西洋式の音韻表なりにまとめる。音節表の方が便利かも知れない。

## 音の變化

地方によると狐をケツネと云つたり、座敷をダシキと云つたりする、この現象を音の變



化と云ふ、ケツネの如きは「キ」が同じ「カ」行の「ケ」になつたので母音變化の結果である、ダシキの如きは「ザ」が同じ「ア」段の「ダ」になつたので子音變化の結果である。

先づ、母音の變化から調べる。

**母音の變化** の中で著しいのは、國語では「イ」段の音と「エ」段の音（犬エヌ 人參ネシジン）、「ウ」段の音と「オ」段の音（鰻オナギ沼ノマ）、「イ」段の音と「ウ」段の音（雲雀ヒバル 薙ミシロ）等、これらの音の間の變化である。「ア」段の音は母音の變化を起す事は少い。

この母音變化も語頭音と語間音とで變化の仕方が違ふ事がある。又、短音の場合と長音との場合で違ひ、「アクセント」の有るか無いかでも違ふ。又「イ」段の音が「ウ」段の音に變化すると云つても各音節によつて色々である。東北などでは「シ」や「チ」は殆ど例外なく「ス」「ツ」に近い音になる、「リ」や「ヒ」も一般に「ル」「フ」に變化し易い、しかし、「ニ」「ミ」は「ヌ」「ム」に變化する事は少く、「キ」が「ク」となるなどは極めて稀である。之も又、地方地方によつて、その傾向が違ふ。

次に短母音と長母音とが變化する事もある。

京阪で一音節の音はよく長母音となる（目メー 蚊カー）。東北や薩摩では長音が反つて短音となる。

重母音は一番變化し易い、就中「アイ」「オイ」「エイ」「ウイ」は注意しなければならぬ。大工、白粉、時計、手拭などの音變化は之である。特に「アイ」の重母音は屢特殊な長母音となる、名古屋や岡山などの音は之である。

音の高さの變化、即ち「アクセント」の變化は方言の一大特色である、方言のアクセントを東京の模式的なアクセントと比較して地方の特色を悟るのも一方法であらう。東京語の例を少しあげる。

二音節。下中型 ハナ(鼻) ハジ(端) カキ(柿)

上中型 ハナ(人名) ハシ(箸) カキ(牡蠣)

下上型 ハナ(花) ハシ(橋) カギ(鍵)

音韻の調べ方



三音節。下中中型 コドモ(子供) キツネ(狐)

上中中型 オヤコ(親子) タヌキ(狸)

下上中型 コゾー(小僧) コネコ(小猫)

下上上型 オトコ(男) ツズミ(鼓)

子音の變化 については先づ注意すべきものは清音と濁音との變化である。

國語では語頭に濁音はないのが本來であるが方言には澤山の例がある。よくビル、バチ、ドンボ、ガニ、ガエルなどと云ふ。

語間で顯著なのは東北地方で「タ」行や「カ」行の清音を悉く濁音化する事である、之は音則的で例外がない。又、ハシメル(始める)、ドヒン(土瓶)のやうに濁音を清音に云ふ事もある。

次には直音と所謂拗音との變化である。

シェン<sup>シ</sup>エイ(先生) ジョ<sup>リ</sup>リ(草履)と云つたり、ソ<sup>ユ</sup>(醬油) カ<sup>ジ</sup>(火事)と云つたりするのはその例である。

一般の子音の變化では

「ダ」行「ザ」行「ラ」行 (座敷ダシキ 來年ダイネン)

「バ」行「マ」行 (紐ヒボ 蛇ヘミ)

「マ」行「ナ」行「ガ」行 (蜜柑ニカン 死ぬシム)

「ワ」行「バ」行 (皺シバ 芝シワ)

などの間の音轉換が普通のものである。

「サ」行「ハ」行間の變化などは、わりに用例の固定したものである。(さんハン ません マヘン そんならホンナラ)。

音節間の變化で特に注意すべきものは

「ヒ」と「シ」との變化 (火鉢シバチ 叱ヒカル)

「ヒ」と「フ」との變化 (髭フゲ 二つヒタツ)

「シュ」「ジュ」と「シ」「ジ」との變化 (主人シジン 城シユロ)

「イ」と「ユ」との變化 (祝ユワイ 夢イメ)



「エ」と「ヨ」との變化（榎實ヨノミ）

「キ」と「チ」との變化（君チミ）

などである。

音變化にはまだ、音脱落と音添加の二現象がある。

母音の脱落する事は東京語のアリマスの「ス」などの母音に著しい。アンタ（貴方）などもアナタの母音の脱けたのである。

「何」がアニになり、私がアタシになり、「蟻」がアイなどになるのは、夫々子音の n、w、r の落ちた爲である。此中で「ラ」行の脱落は注意する必要がある、r は脱落しないまでもよく微弱な音になる。

添加現象では促音と鼻音との加はる事が特に注意する値がある。「眞黒」がマックロとなり「長尻」がナガッチリとなるのは促音添加で、牛蒡がゴンボー、天狗がテンゲンとなるのは鼻音添加である。

「雑巾」をゾッキンと云ひ「幽霊」をユーレンと云ふ様に長音と促音と鼻音とは互によく

轉換する。

又、濁音や鼻音の上などで他の音がよく鼻音に變化する。ソンドケ（其だけ）クンマ（車）などはその例である。

東北で鼻音が言葉の中に多いのは有名な事實である。

最後に音轉置と云ふ現象がある。

之は一語中の子音が互に位置を轉じる現象でチャマガ（茶釜）ツモゴリ（晦）ツブレ（釣瓶）アルバ（油）などはその例である。

### 語法の調べ方

方言の語法を調べる爲には文語、口語ともに一通りの語法的知識が必要である。勿論、方言の語法には標準語の語法がそつくり、あてはまるとは云ひ兼ねる點はあるが一應は標準語法を心得て置かねば駄目である。

吉岡郷甫氏 文語對照語法（光風館）

語法の調べ方



小林好日氏 國語國文法要義(京文社)

その外、文部省の口語法特にその別記や、三矢氏の文法、山田氏の文法などは参考すべきものである。

外に國語學、言語學の書籍も讀んでおけば一層よい。

安藤 正次氏 小さい國語學(廣文堂)

同 氏 言語學概論(早稻田大學出版部)

神保 格氏 言語學概論(岩波書店)

## 名詞

名詞については單語集の方に蒐集の諸注意を述べたから略しておくが、固有名詞や外來語について特に注意を拂ふ事が必要である。

語構造について調査すると、そこに方言的な特色が見出される事がある、東北地方の「コ」と云ふ接尾語(茶碗チャワンコ)、關東地方などの「メ」と云ふ接尾語(牛ウシメ)などはその一例である。

人名や親族名の下につける接尾語は

叔母サン、兄キ、姉ゴ(親族名)、中村氏、太田君、山田サン(姓)、勝太郎サン、お菊ちゃん、勝子(名)、松ちゃん、留ドン、お梅サ(略名)

に分け、なほ敬語か卑語か、男女、老幼の別について調べる。

複數の接尾語も一應、標準語以外のものを人と物とにわけて探してみる。

人代名詞は身分、年齢、男女の關係を細かく調べる。他稱の人代名詞は話者と對者と、話題になる人との身分上の三角關係が出来るので随分複雑である。

數詞は琉球などを除いてはあまり重要なものはないが、金錢や酒量などに關し地方的な呼稱がある。十錢を一貫と云ひ、二合五勺を「コナガラ」と云ふ如きものである。職業による符牒も集められたら集めてよい。

「兎一羽」「琴一面」の羽や面のやうな助數詞には時に地方的なものがある。

## 名詞の格と助詞

名詞の格は助詞であらはずが、主格や目的格は助詞を使はない所が多い。



主格は方言によつて

鳥ガ啼く、鳥ン啼く、鳥ノ啼く。

などと云ひ、目的格には

酒ヲ飲む、酒バ飲む、酒ガ飲みたい。

などと云ひ、之が色々な音韻變化を起す。

サキヨ、サキユ、(酒を) シンブンノ (新聞を)

「に」に當る助詞は地方によつて區々である、

動作の目的を現はす時に「花見ケ行く」などと云ふ地方がある。

「私に書けない」などの例では「私ガニ」などと云ふ地方がある。

「にて」が「で」となり、「船で行く」「筆で書く」と云ふやうな場合に特殊な動詞を使ふ地方がある。特に「でも」の併列形(水でも湯でも)などには地方的に云ひ方がかなり違ふ。

方向は「に」で云つたり「へ」で云つたり、地方で定まらない、「さま」の變形を使ふ地

方もある。

「の」名詞の代用となる場合、例へば「貴方のは美しい」の類の「の」は地方で様々な形がある。

「と」「山田と云ふ人」などは助詞を省いて「山田云ふ人」などと中國の一部で云ふ。

「と云ふ」は音韻縮約の結果「チュ」「ツ」など種々な形となる。

「より」比較を示す場合に「より」でなく、「甲トハ乙が高い」と云ふやうな云ひ方もする。

「まで」鹿兒島では「まで」の代りに「ズイ」を使ふ。

「こそ」の係結は關西や九州には崩れながらもまだ残つて居る、富山などにも「風こそ吹けか雨は降らん」と云ふやうな形がある。

「ほか」地方により「ホチャ」「ハチャ」「ハキヤ」などと云ふ

「ばかり」は音韻上、豊富な變形がある、東北では「コ」と結合して「ベッコ」とも云ふ、「五錢が買ふ」の「ガ」も類似の意義を持つてゐる。



「ぐるみ」「盆ぐるみ」と云ふやうな抱合を表はす助詞も種類が多い、「盆マジラ」「盆サラ」「盆グチ」など地方的に種々な云ひ方をする。

### 動詞、形容詞

動詞、形容詞にも構造上から注意すべき事が多い、「だます」(欺)が「ダマカス」「ダマクラカス」となつたり、「しぼる」(縛)が「フンジバル」になつたり、又「まるい」(圓)が「マンマルイ」や「マルコイ」になつたりして意味にいくらか變化を與へる事がある。

しかし、動詞形容詞について最も注意すべき事は勿論、その活用形にある。特に動詞の二段活用、一段活用、加行變格、佐行變格は難物である。

九州では二段活用中、下二段は文語形に近く、上二段と「出る」「寝る」は地方によつては良行四段に近い形をもつてゐる。奈行變格「死ぬ」は地方によつては文語形に近い。

本州東部と本州西部とで活用形を異にする動詞もかなり有る。「起く」「飽く」「借る」「延ぶ」「恨みる」等は之である。「借りテ」と「借ッテ」、「買ッテ」と「コーテ」の對立はこの爲に起つた。

「出る」「出来る」は標準語と違つた用法で使つてゐる地方が多い。「有る」「居る」も同様である、又「キル」と「ナル」との分布も注意すべきものである。

「いらっしゃる」「おっしゃる」「めしあがる」等の敬語動詞の種類や使用数の多少は注意して見る必要がある。

形容詞では九州の「善か」「悪か」の形が目につく。八丈島にも似た形がある。近畿では意を強める爲に「シーロイ」(白い)のやうに長音にする習慣がある。一般に副詞形に變つた形がある。

東北では「善いば」「善いども」のやうな形があつて已然形の使用が少い。

形容詞か形容動詞か所屬の極まらぬものも有る、「丸い」「丸だ」、「四角い」「四角だ」はその例である。指示形容詞の「そんな」「こんな」には種々な方言形式がある。

動詞形容詞の下に接して句を接續する助詞には方言的に特色に富んだものがある。

理由を示すものは標準語の「から」の外に

雨が降るノデ、雨が降るデ、雨が降るダデ。



雨が降るヨッテ、雨が降るヨッテニ。

雨が降るサカイ、雨が降るハカ、雨が降るスケ。

雨が降るキニ、雨が降るキー、雨が降るケン。

等種類が多い。

反対を示す「けれども」には「ケンド」「ケードモ」などの変化がある。九州には「ばとても」の訛なる「バツテン」が西部に行はれてゐる。文語のやうに「ども」丈を使ふ地方もある。

「の」に、「雨が降るのに」の形には地方によつて、「ノンニ」「ガニ」「ナニ」「ソニ」「トニ」の変化がある。

条件の「と」の使用法中、「雨が降ると」と云ふ時に「雨が降るトサイガ」等と云ふ地方もある。

「歩きながら」「話しながら」にも二三の方言形式がある。

### 種々な話法

標準語では多く助動詞をかりて敬讓、指定、否定、時、推量、希望、命令、禁止、受身、可能、禁止等の種々な表現をするが方言では之は助動詞ばかりでなく、他の形式で表はす事もある。

敬讓の云ひ方。敬語の形式が主要なものである、之は動詞では敬語動詞を使ふ、之は地方には發達しない所が多い。其他、接續語の「お」（御）の使用数が少い所もある。助動詞には極めて複雑な種類があり、各時代の敬語助動詞を方言の上に認める事が出来る、最も簡単なものでは「今日は善い天氣だス」と「ス」一語で敬語形式を表はすものもある。

「ございます」なども「ガス」「ガンス」「ゲス」等種々な變形がある。

反対に「行きゃーがる」「見くさる」等の罵詈雑言の云ひ方も集めてよい、接頭語では「ど盗人」「いけすうくしい」等の類が用ゐられる。

指定の「花だ」「花です」も「チャ」「ヤ」とか「ドス」「ダス」とか地方的變化がある、之が「だらう」「チャロー」「ヤロー」などの推量形とも關係がある。

動詞、形容詞では「行くのだ」「悪いのです」のやうに云ふのを地方により「行くだ」「悪



いです」と云つたり、其他色々な云ひ方をする。

否定 では「行かない」「行かないで」「行かなかつた」に對し、關西で「行かん」「行かない」「行かなンダ」と云ひ、地方によると「行かザッタ」とも「行かんカッタ」とも云ふ。

此の分布を調べると富山と愛知との東境とを貫く線で本州を東西の二大方言區に分ける事が出来るのが分る。否定推量は「まい」である。

時 の言ひ方では過去に「行つタッタ」と云ふやうな形があり、「けり」の名残りと思はれる「ケ」が各地にある。「行つたッケ」の回想の形もあり「悪いッケ」の詠嘆形もある。未來は地方によつて色々な現はれてゐる。

起きよー。起きョー。起きユー。起きべー。

起きーズ。起きズ。

自己の覺悟をあらはす形式と、未來の想像を表はす形式とは共通の事もあり別の事もある。秋田では「べい」は未來の想像は表はすが自己の決意は表はさぬさうである。

推量形は普通「だらう」を使ふ、又「らしい」も用ゐる。本州中部に「行くヅラ」「行

くら」と云ふ形がある、又過去推量の「行ッテラ」と云ふ形もある。

また、關西の「降りヨル」「降りオル」「降ットル」「降ッチヨル」は東京語の「降つてる」に當るものであるが關西では雪が現に降りつつある状態と、降り止んで積つてゐる状態とを區別して使ひ分けてゐる。

希望 では「たい」が普通であるが、敬語と關係して種々な云ひ方がある。

頂戴の訛の「チョー」と云ふ形もあり、「ゴセ」と云ふ形もあり、「下さい」の訛音も極めて多い。

命令 は「見ろ」「見レ」「見ヨ」「見イ」を初とし「見マシヨ」「見ヨー」等の形もあり、「お見な」など云ふ和かい云ひ方もある。

禁止 もかなり方言形式が多い、本州中部に散在する「ナナ」と云ふ言葉を動詞の上に冠する形は注意すべき面白いものである。

受身には注意すべきものはないが、可能の形式は極めて多い。

讀める、讀みエル、讀むニイ、讀みガナル、讀みキル、



否定には「ヨー讀マン」がある。

使役 には「せる」の外に佐行四段の「す」の行れて居る地方がある。「女中に掃かス」。地方によつて「させる」は動詞の下で「ラセル」となる、「煮ラセル」。

話法の形式はまだ澤山ある。

「昨日立つたとさ」「昨日立つたゲナ」の傳聞、

「雪のやうだ」「雪のゴタル」の比況、

「まだ來ないか」「之は犬ナ」の疑問、

「來るもんか」「來るモノダ」の反語、

「行かなけりやならない」「行かんナラン」の義務、

數へ立てれば、殆ど際限はあるまい。

### 雜詞其他

副詞では呼應の規則が地方によつて違ふ。又寫聲語、擬容語に地方の特色が見える。

應答の言葉にも注意すべきものがある。之等については單語集の中で既に説いた事だか

ら省いて置く。

感嘆詞には地方的特色が見える。句尾に現れる「ノンシ」「ナンシ」「ナモシ」「ネス」の助辭も地方色の豊かなものである。

語序についてはあまり方言的特色はないやうである。たゞ文の終りに代名詞を繰返す地方がある。

文全體の上に語の「アクセント」と違ふ文の調子がある。之には地方的な特色がある、水戸地方の尻上り調子などは有名なものである。(終)



昭和三年六月十五日印刷  
昭和三年六月二十日發行

方言採集手帖

定價金壹圓

著者 東 條 操

發行者 岡 村 千 秋  
東京市小石川區茗荷谷町五十二番地

印刷者 望 月 清 矣  
東京市京橋區山下町一番地

東京市小石川區茗荷谷町五十二番地

發行所 郷土研究社

振替口座東京三三九一七番

英文通信社印刷所刷



# 爐邊叢書

爐邊叢書は口碑傳説土俗を集録す  
菊判半載形にして紙數二百頁内外  
定價各册不同なれど壹圓を越えず

既刊書目 (昭和三年六月現在)

飛驒の鳥	川口孫治郎氏	價九〇錢	送費四錢
三州横山話	早川孝太郎氏	七〇錢	四錢
古琉球の政治	伊波普猷氏	八〇錢	四錢
郷土誌論	柳田國男氏	八〇錢	四錢
南島説話	佐喜眞興英氏	八〇錢	四錢
小谷口碑集	小池直太郎氏	壹圓	四錢
江刺郡昔話	佐々木喜善氏	八五錢	四錢
祭禮と世間	柳田國男氏	六〇錢	四錢
續飛驒の鳥	川口孫治郎氏	九〇錢	四錢
熊野民謡集	松本芳夫氏	八〇錢	四錢
アイヌ神謡集	知里幸惠女	八〇錢	四錢

八重山島民謡誌	喜舍場永珣氏	壹圓	四錢
筑紫野民譚集	及川儀右衛門氏	九〇錢	四錢
相州内郷村話	鈴木重光氏	八〇錢	四錢
能美郡民謡集	早川孝太郎氏	八〇錢	四錢
沖繩の人形芝居	宮良當壯氏	八〇錢	四錢
吉備郡民謡集	榎本楠郎氏	八〇錢	四錢
土佐風俗と傳説	寺石正路氏	八〇錢	四錢
琉球人名考	東恩納寛惇氏	九〇錢	四錢
シマの話し	佐喜眞興英氏	八〇錢	四錢
口丹波口碑集	垣田坪井兩氏	九〇錢	四錢
與那國島圖誌	本山桂川氏	八〇錢	四錢
羽後飛鳥圖誌	早川孝太郎氏	壹圓	四錢
紫波郡昔話	佐々木喜善氏	壹圓	四錢
津輕舊事談	中道等氏	八〇錢	四錢



越後三條南郷談	外山 曆郎氏	八〇錢	四錢
遠野方言誌	伊能 嘉矩氏	八〇錢	四錢
東石見田唄集	三上 永人氏	八〇錢	四錢
チャモロ語の研究	松岡 靜雄氏	八〇錢	四錢
甲斐の落葉	山中 笑氏	壹圓	四錢
小縣郡民謠集	小山 眞夫氏	六〇錢	四錢
牟婁口碑集	雜賀貞次郎氏	壹圓	四錢
紀州有田民俗誌	笠松 彬雄氏	九〇錢	四錢
方言採集手帖	東條 操氏	壹圓	四錢

柳田國男著 【郷土研究社第二叢書】

山の人生

四六判 三百餘頁  
 裝幀 頗高 雅  
 定價 拾金 貳圓  
 送料 貳圓

附錄 山人考 問題及書名索引

先生二十年の山人研究の要領である○耳と近世記録からの無數の實例が引用してある○山男山女は確かに日本の山には居た○多分は先住異種人の退化した破片であらう○古來の我々の信仰生活の中にはこの現實の經驗を基礎としたものが幾らも有るやうだ○是が奇書山の人生のテーゼである○全く新しい一派の社會學である。

目次の一

- 山に埋もれたる人生ある事
- 人間必ずしも住家を持たざる事
- 凡人遁世の事
- 山の神に嫁入すると云ふ事
- 山人の通路の事
- 巨人の足跡を崇拜せし事
- 是は日本文化史の未解決の問題なる事
- 尙も少年の往々神に隠さるゝ事
- 特に若き女の屢隠されし事
- 深山の結婚の事
- 鬼の子の里にも産れし事
- 山の神を女性とする例多き事
- 學問に此不思議を解釋し得ざる事
- 其他十數項



早川孝太郎著 【郷土研究社第二叢書】

# 猪・鹿・狸

四六判二三〇頁  
定價 壹圓五拾錢  
送料 金拾錢

圖版十九個 何れも著者の自筆にかゝるもの

山の一軒屋は今亡びんとしてゐる。幾代となく其中に住んだ撲訥な話ずきが、寂しがつて里へ下りて來た。獸が居なくなつたからである。此書は三州豊川上流の山地に於ける、彼等が最終の記録である。猪の話が十九、鹿の話が十九、狸の話が二十一集めてある。筆者は最も丹念なる畫家であつて、叙述は頗る精彩を極めてゐる。

内容の一の部  
———  
狩人を尋ねて  
猪垣の事  
山の神と猪  
猪除けのお守  
巨猪の話

木地屋と鹿の頭  
鹿の毛祀り  
鹿に見えた砥石  
浄瑠璃姫と鹿  
一ツ家の末路  
鹿捕る畏

緋衣を纏ふ狸  
塔婆に生首  
狸を拾つた話  
鎌に化けた狸  
狸の怪と若者  
狸の最後其他四十項

岡田建文著 【郷土研究社第二叢書】

# 動物界靈異誌

四六判三〇〇頁  
定價 壹圓二拾錢  
送料 金貳圓

心靈及妖怪研究の第一人者たる岡田翁が、動物の妖怪現象に關して多年の蘊蓄を傾倒した天下の珍書である。收むる所、蝦蟇、狐、狸、貉、河童、外道、猫、蛇等に互り、既往二十年間の著者の體験や同志の報告に加ふるに古人の記録を以てしたるもの。稀世の珍談は悉く是實説、一讀正に驚倒に價す。宜なり發賣以來好評噴々たるや。斯道研究家は勿論のこと、妖怪否認の學者常識家も齊しく此大自然妙力の深刻な研究記述を讀め。漫然たる世の妖怪誌に非ず。

△△蝦蟇の話し話  
△△狸の話し話  
△△外道の話し話

△△猫の話し話  
△△貉の話し話  
△△蛇の話し話

△△狐童の話し話  
△△河童の話し話



笠井新也著【郷土研究社第二叢書】

# 阿波の狸の話

四六判二九〇頁  
装幀頗高  
定價頗高  
送料十二錢

阿波は實に我國に於ける狸傳説の寶庫である。されば狸傳説を研究せんとせば、先づ阿波の狸よりせざるべからず。此書は阿波に於ける無数の狸傳説の中、狸の怪異乃至迷信に關する民間傳説として著名なもの、説話形式の代表的なもの數十篇を採録す。實に著者十數年の辛勞の結晶である。我國の妖怪學は今尙幼稚の域を脱せず、精密な研究書無き時、此書はやがて貴重なる資料とならん。切に大方の愛讀を望む。卷頭口繪、玻璃版三葉。卷末には阿波著名狸族分布圖を掲載す。

- △狸火の話
- △狸が人をばかした話
- △狸が狐に騙された話
- △狸が化けて失敗した話
- △狸が狸を騙した話
- △狸が人を騙した話
- △狸の出征した話
- △狸が仕返した話
- △狸を祀る祠の話
- △狸合戦の話
- △狸使の話
- △狸が恩義に報いた話
- △狸が人に物を似せた話
- △狸が人に惚れた話
- △阿波名狸録



FT IV-31

終